

**謹賀新年**

昨年は東日本大震災や原発事故、台風災害など、日本中が揺れた年でもありました。でもそれだけに、例年以上に「ありがとう」という言葉が多く交わされた年でもありました。「ありがとう」の対極は「あたりまえ」。当たり前と思える毎日を送ることのできる有り難さを忘れない一年にしたいと思います。

「ふるさとかるた浜松」

**本年度の講座 好評のうちに終わる**

本年度、文芸館では15の講座を計画しましたが、昨年12月8日の「声であらわす文学作品(講師:堤腰和余先生)」を最後に、すべての講座が終了しました。

すべての講座で80%以上の受講率を確保できた上、受講率100%の講座も幾つか見られました。多くは初心者対象の入門講座でしたが、この講座をきっかけに継続して活動を続けてくだされば、文芸館の使命も少しは果たせたことになるのではないかと思います。

ここでは、最後に終了した「声であらわす文学作品」から、参加された方の感想をご紹介します。

- 表現の仕方、とても参考になりました。このような機会があれば、また参加したいと思います。
- 大変有意義でした。初めての講座で、とても楽しかったです。またこのような企画をお願いします。
- 文学を読むことの楽しさ、奥深さを知り、とても楽しく日常生活にないこうした文学の生活にまたひたりたいと思います。
- 6回が毎回楽しく受講することができました。朗読の勉強をしているのですが、教えていただくことが納得できることが多く、ヒントもいただきました。他の方たちとのお話もできてうれしかったです。先生の上から視線でない優しい気持ちのこもった講座に感謝します。



各講座の講師の先生方、受講して下さった皆様、本当に有り難うございました。来年度も大勢の方々のニーズに合った講座を開設して参りたいと思います。

**文芸館の四季**

昨年4月に私が文芸館に赴任して以来、館を取り巻く草花が、移りゆく季節を様々に物語ってくれました。

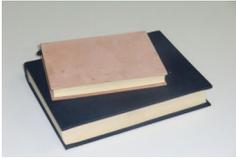
そんな草花がこれから眠りに入ろうとする一時期、今までのフィナーレを飾るかのように、華やかな風景を演出してくれました。そしてその主人公は花でも実でもない、普段は脇役を務めている木の葉たちでした。

駐車場にはイチョウの落ち葉が金色の絨毯を演出し、館の裏へ回れば、カエデの葉がまさに錦織りなす鮮やかさで目を楽しませてくれました。

季節外れですが、打ち上げ花火の最後のスターラインを見ている錯覚にとられました。

**お知らせ**

- 1階の展示ケースに「ふるさとかるた浜松」を展示しました。ご覧ください。(1月31日まで)



## 摩訶耶寺の庭園 藤枝静男「庭の皮はぎ」

平成 20 年米国の日本庭園専門誌「ジャーナル・オブ・ガーデニング」が選んだ日本庭園ランキングに、浜松の摩訶耶寺庭園が選ばれた。1位は島根県の足立美術館、2位が桂離宮だった。

昭和42年秋、東名高速道路工事に来ていた日本庭園研究会顧問水島信一が発見。翌年8月3日から9日まで、同会調査団によって本格的な学術調査が行われた。

調査を指揮した古河功識会長は、

「摩訶耶寺庭園は名庭中の名庭である。よくもこれだけの庭が埋もれていたものだ —、論文の一枚一枚を書き上げる度に、常に頭に浮かんで来たのはこの感慨であった。まったく本庭の発見程、庭園史研究の上で貴重でセンセーショナルなものは、近年その例を知らない。本庭によって日本庭園史の一部が塗り変えられた、と云っても過言ではないと思う。」

と「学術報告書」に書いている。

面積 1.510 m<sup>2</sup>、鎌倉時代前期の作で静岡県で最古。この時代の名園で保存状態の良いものは、それまで京都の西芳寺(苔寺)、鹿苑寺(金閣寺)、天龍寺の三庭園に過ぎなかった。

様式は、池泉鑑賞兼廻遊式蓬莱庭園で、南西に位置する客殿のあたりから鑑賞されるように作庭されている。

しかし、現在の本堂、護摩堂ほか寺内の建物はすべてその後の築により、この庭とは無関係である。寺が千頭峰からこの地に移った平安末期には、本堂は池泉の南部、現在の参道と小川の奥にあったようだ。現在の本堂は寛永年間の築である。

当時三ヶ日高校に勤務していた郷土史家高橋佑吉は、庭園の造成者は、伊勢神宮の祭主、大少宮司家中臣氏の系列に属する人たちではなかったかと報告書に一文を寄せている。

藤枝静男は、この寺にある千手観音や阿弥陀如来像等四体の美しい平安仏に魅かれて、発見の十数年前から度々摩訶耶寺を訪れていた。

「ある日行くと庭全体が完全にひと皮剥がれて、まるで羽をおしられた鶏のように寒々と周囲の緑のなかに投げ出されていたのである。土管はもちろんとり去られている。池のまわりの雑草から対岸の小山の雑木雑草まで全部ひき抜かれてざらついた土肌は白っぽく乾きあがり、その間にゴツゴツした大小の石組みの群れが裾のあたりまで裸にされて露出していた。

私は通りがかりにそれをちらっと見たとき、ある統一的な感じを持った。統一的というとおかしいが、それまでのどうでもいいというのと違う、一定の眼を持った人がある目的をもって造ったというような、つまりひとつの作品がそこにあるという感じを受けたのである。

それで庭の正面、小さな護摩堂の裏手、古いころの屋敷跡だという梅林に立ってみるとこの感じがいっそう強まった。(略)浅い池水の様子や、対岸の岩の群れの向こう側の、山ともいえぬ低いなだらかな小山のなりが、ちょうど大和絵の風景画をみるような穏やかさで快い感じがする。あの山が春さき短い雑草でおおわれたらさぞ美しいだろう、それには杉菜でも植えると柔らかくていいかも知れないなどと思った。この時は住職に会えず、その後二度ばかりたずねて皮剥ぎの経緯を知ることができた。」

と書いている。そして、1年後送られてきた「報告書」を読んで、

「はじめ盲目、しかし途中ではあるがとにかく学者の説を知る前に感心したのだから私もまんざらではないだろう。」

と結んでいる。